

2025年3月 刊行

2024（令和6）年度 調査報告書

大阪大学大学院人間科学研究科／人間科学部
比較発達心理学研究分野

<https://baby-lab.hus.osaka-u.ac.jp/>



大阪大学大学院人間科学研究科

鹿子木研究室

Kanakogi Baby Laboratory

●研究活動にご協力いただいているお子さま、保護者さま、先生方へ●

2021年度に発足された赤ちゃん研究員制度によって、本年度も多くのお子さまが大学での調査に参加してくださいました。2023年度からは「赤ちゃん・子ども研究員」制度へと名称が改められ、さらに多くのお子さまや保護者のみなさまにご協力いただいています。また、都島児童センター、みくま幼稚園、沢池幼稚園をはじめ、園や学校でも多くのお子さまが調査に参加してくださいました。お力添えをいただきました関係各位に心より御礼申し上げます。

私たちの研究は、お子さまと保護者さま、園・学校の先生方の研究への理解と参加によって成り立っています。ご参加いただいたお子さまと保護者さまには心より感謝申し上げます。なお、今回は残念ながらご予約が合わなかった方や調査の対象年齢の都合で調査をお願いできなかった方は、登録していただいたにも関わらず大変申し訳ございませんでした。もし次回に参加する機会がありましたら、どうぞよろしくお願い申し上げます。

本研究報告書は、私たちの研究室が本年度に行った調査結果をまとめたものです（継続研究はここでは報告せず、調査が終わり次第報告いたします）。すでに学会で発表したり、論文にまとめたりして社会に発信しているものもあれば、問題提起の段階にある知見もあります。これらの発見や知識は、みなさまのご協力があったのものであることを忘れずに、日々の研究にあたりたいと考えています。

ご自身が関わった研究成果はもちろん、その他の研究成果にも目を通していただくと幸いです。なお、学会や論文で未発表のデータを多く含んでおりますので、報告書の詳しい内容については、InstagramやX（旧Twitter）といったSNS等で公開されることがありませんよう、どうぞよろしくお願いいたします。

来年度からは、研究室の名前が「比較発達心理学分野」から「発達認知科学分野」へと変更になります。それに伴いHPもリニューアルしますので、お時間のある方はぜひHPをご確認ください。また、赤ちゃん・子ども研究員の登録方法の変更もごさいます。詳細は追ってお知らせいたしますので、お手数をおかけしますが、再登録のほうをどうぞよろしくお願いいたします。

大阪大学大学院人間科学研究科

鹿子木 康弘



目次

赤ちゃん・子ども研究員のみなさまにご協力いただいた調査

ロボットや人からの言葉かけは子どもの粘り強さを高めるのか？	01
6歳児は「わるいこと」にどう対処する？	02
赤ちゃんの世界のとらえ方は文化によって異なるか	03
ARを通して物体と関わることで、幼児の物体を大切にする行動が促進されるか？	04
オンライン教育におけるずる行為を減らせるか	05
子どもと大人のおせっかいな人に対する評価	06
赤ちゃんロボットの注意の向け方によって養育者の教え方は変化するのか	07
子どもは革新的な人物をどのように評価するか	08
子ども型ロボットの注意特性によって養育者は視線の向け方を変える？	09
1歳後半児はどのように音が似ている単語を学習するの？	10

目次

主に みくま幼稚園 のみなさまにご協力いただいた調査

子どもは自分で戦略を考えられたときに粘り強さを発揮する	11
-----------------------------	----

その他の園・学校のみなさまにご協力いただいた調査

子どもと大人のおせっかいな人に対する評価	12
----------------------	----

おねがいとお知らせ

- 本報告書の内容は、学会や論文で未発表のデータを多く含んでおります。報告書の詳しい内容については、InstagramやX（旧Twitter）といったSNSなどで公開されることがないよう、よろしくお願いいたします。
- まだデータ収集の途中であり、報告段階に至っていない調査については、次年度以降の報告書にてご報告さしあげます。ご容赦くださいますようお願いいたします。



ロボットや人からの言葉がけは 子どもの粘り強さを高めるのか？

石川 萌子（大阪大学大学院人間科学研究科 博士後期課程2年）

●背景・目的

子どものころの「粘り強さ」（難しい課題をどれくらい頑張れるか）は、将来の成功を予測するといわれています。そのため、どのようにして粘り強さを高められるかが注目されています。昨年の本研究室の調査から、ロボットが課題中に言葉がけをすることで、子どもは粘り強く課題に取り組めることがわかりました（調査1）。今年度は続く研究として、ロボットと人の言葉がけが子どもの粘り強さに与える影響に違いはあるのかを調べました（調査2）。

●方法

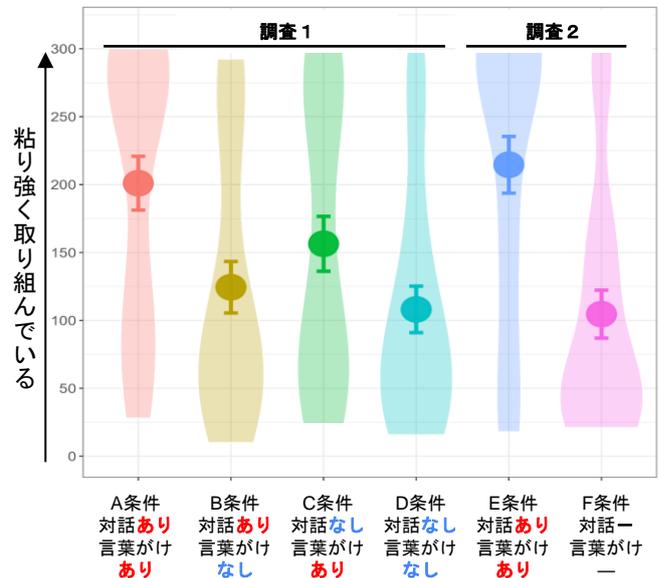
調査1では、4～5歳のお子さま108名（昨年度報告した72名を含む）がロボットと一緒に課題に取り組みました（お子さまには課題前のロボットとの対話や課題中のロボットの言葉がけの有無が異なる4つの条件のうち1つに参加してもらいました）。調査2では、4～5歳のお子さま54名に、人と一緒に課題に取り組む条件（課題前に人と対話をし、課題中にその人が子どもに言葉がけを行う）、または一人で課題に取り組む条件のどちらかに参加してもらいました。粘り強さは、開けるのが難しい木箱を開けようと何秒取り組んだかで調べました。



●結果

【調査1】ロボットからの言葉がけがある場合（A・C条件）、ロボットからの言葉がけがない場合（B・D条件）よりも、子どもは粘り強く課題に取り組みました。また、ロボットとの課題前の対話の効果はみられませんでした。

【調査2】ロボットの言葉がけ（A条件）と人の言葉がけ（E条件）効果が異なるかを調べました。その結果、どちらの条件でも子どもは同程度、粘り強く課題に取り組むことが明らかになりました。一方で、ロボットや人と課題に取り組んでいるときの方が（A・E条件）、一人で課題に取り組んでいるとき（F条件）よりも粘り強く課題に取り組むことがわかりました。



●考察・今後の展望

本調査では、ロボットの言葉がけは人の言葉がけと同様に子どもの粘り強さを高めることがわかりました。ロボットか人にかかわらず、応援してくれている他者がいることで、子どもは難しいことであっても取り組み続けられると考えられます。今後は、子どもの粘り強さがどのような状況や他者との関わりによって高められるのか、調査を続けていこうと考えております。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

調査へのご協力ありがとうございました。これから様々な困難に直面する子どもたちを少しでもサポートできるように、粘り強さ研究を続けていきます！

6歳児は「わるいこと」にどう対処する？

戸田 梨鈴（大阪大学大学院人間科学研究科 博士1年）

●背景・目的

私たちは幼い頃から道徳やルールに対する高い感受性を持っており、6歳ごろになると、自分が直接関わっていない場合でも、道徳に反する相手に対して道徳・ルールを教えようとしています。同時に、この時期の子どもは、日常での関わりを通して相手をゆるすことも学んでいきます。一方、この時期の子どもたちが「道徳を教える」「ゆるす」行動をどのように使い分けているのかを調べた研究はありません。

昨年度の調査では、これらの行動が「相手の謝罪の有無」によってどのように変化するかを検討しました。これに引き続き、本年度は「道徳を教える時のコスト」の影響に注目しました。私たちが他者に道徳を教えるときには、必ず自分にも負担（=コスト）がかかります。このコストを6歳児も理解して、それに応じて行動を変化させるのかを検討しました。

●方法

お子さまに、友人の絵を破ってしまう子ども（違反者）の動画を見ていただき、この違反者に対する行動として以下の3つの選択肢（右図）のうち、いずれか一つを選んでいただきました。

- ① 違反者のおもちゃを取り上げ、道徳を教える
- ② 何もしない
- ③ 違反者が欲しがっていた新しいおもちゃを与える（ゆるし）

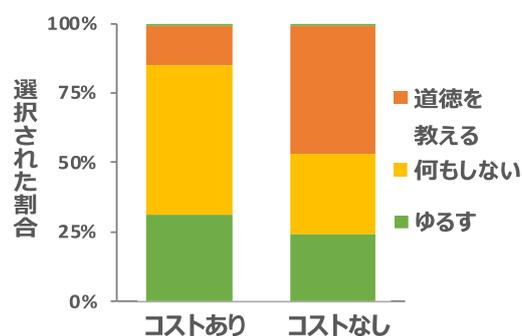
このとき、道徳を教えるには自分もおもちゃを我慢しなくてはならない「コストあり条件」と、自分はおもちゃで遊ぶことができる「コストなし条件」を設定し、選択に違いが生じるかを調べました。



●結果

調査の結果、6歳児の「道徳を教える」「ゆるす」という行動について、主に以下の2点が示されました。

- ① 道徳を教える行動にコストがかからない場合は、コストがかかる場合に比べて「何もしない」の選択が減少し、「道徳を教える」の選択が増加する
- ② 道徳を教える行動のコストに関わらず、一定数の子どもは「ゆるし」を選択する



●考察・今後の展望

本調査の結果から、6歳児は相手に道徳を教える、何もしない、ゆるすという、道徳違反に対する3つの戦略を、自分にかかるコストを考えて使い分けていることがわかりました。

今後の調査では、子どもたちが様々な道徳違反に対してどのように対処し、その行動が相手にどのような影響を与えるのかを検討していきます。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

皆さまにご協力いただきまして、子どもたちの「道徳」に関わるころの一側面を調べることができました。ありがとうございました。

赤ちゃんの世界のとらえ方は文化によって異なるか

マリーナ バイルダウフ (University of Regensburg, ドイツ)
戸田 梨鈴 (大阪大学大学院人間科学研究科 博士1年)

●背景・目的

赤ちゃんは、日々さまざまなものを見て学んでいます。これまでの研究から、生後数ヶ月の赤ちゃんでも、「動物」「食べ物」など複数のカテゴリーを区別していることが示されています。一方、人のものの見方や注目の仕方は、文化によって異なることも知られています。私たちは、赤ちゃんのカテゴリーを区別する力に、文化がどのような影響を与えるのかを検討するために、ドイツと日本で調査を行いました。

●方法

ドイツと日本の、5-6ヶ月および10-11ヶ月のお子さま180名以上にご協力いただきました。

お子さまには、モニターに表示される「食べ物」「もの」「行動」「顔」「場所」という5つのカテゴリーの写真をご覧いただきました。各カテゴリー

の写真には、ドイツの文化に馴染みのあるもの（例：プレッツェル）と日本の文化に馴染みのあるもの（例：おにぎり）が含まれていました。同時に、お子さまにEEG（脳波計）キャップを着用していただき、画像を見ている間に脳がどのような活動をしているかを調べました。



●結果

ドイツでみられた結果と同様に、日本でも5-6ヶ月と10-11ヶ月の子どもが、異なるカテゴリーの写真を区別することができることが示されました。例えば、早くも5ヶ月ごろから、エアコンの写真は「もの」のカテゴリーとしてとらえられているようです。また、日本のお子さまは、日本の文化に馴染みのあるものの方がドイツのものより、より若い月齢で正確にカテゴリーを区別できることも示されました。

カテゴリーごとの違いや、ドイツと日本のお子さまの違いについてはさらに分析中です。

●考察・今後の展望

本調査の結果から、ものの属するカテゴリーを区別する力は、生まれてから1年の間に発達することが示されました。また、この力は、赤ちゃんのくらす文化において得られる経験をもとに形作られていく可能性があります。

今後も、さらに得られた結果の分析を進めることで、赤ちゃんが自分のいる世界をどのように理解していくのかを明らかにしていきます。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

たくさんのお子さま・ご家族のみなさまにご協力いただき、ありがとうございました。

Thank you so much!

ARを通して物体と関わることで、 幼児の物体を大切にしている行動が促進されるか？

黄 少君（大阪大学大学院人間科学研究科 修士2年）

●背景・目的

子どもは、人のような見た目をしていたり主体性のある物体に対して、社会的な関わりをすることが知られています。したがって、ARを通して、物体に人のような見た目がある（例：目や口がある）様子を見せた場合、その物体自体の見た目は変化していなくても、子どもがその物体に対してより社会的な関わりをするのではないかと考えられます。この調査では、ARを通じて、**物体とのやりとり**を可能にしたり、**物体に人間のような特性を付加する**ことで、子どもたちの**認識を変え、物体をより大切にしている行動を促す**ことができるかどうかを検討しました。

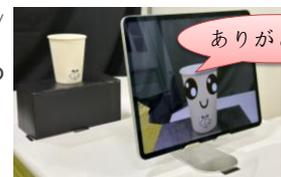
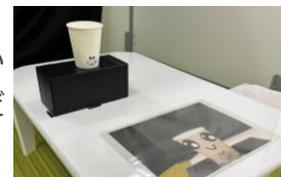
●方法

6歳のお子さま計84名にご協力いただきました。

この調査ではお子さまに、ランダムに次の三つの条件のいずれかで「コップくん/ちゃん」、「お皿くん/ちゃん」と関わっていただきました：

- ①コップ/お皿 くん/ちゃんの写真だけ
- ②コップ/お皿 くん/ちゃんのAR映像
- ③コップ/お皿 くん/ちゃんのAR映像とやりとりができる

その後、「このコップ（またはお皿）は、もういらないから捨ててね」といい、子どもが実際に捨てるまでの時間を記録しました。最後に、子どもたちの物体に対する認識をしらべるために、コップ/お皿は「目がみえていると思うか」「賢いと思うか」「感情があると思うか」を尋ねました。



●結果・考察

- ①**物に対する認識**：ARを通して紹介された物体の方が、静止画像で紹介された物体よりも、**人間らしい特性を帰属される傾向はみられましたが、この効果は条件間で顕著な差を生じさせるほど強いものではありませんでした。**
- ②**物を大切にしている行動**：ARを用いたかに関わらず、子どもたちは教示者の指示に素直に従い、ためらうことなく物体を捨てる傾向がみられました。つまり、**ARの有無にかかわらず、子どもたちが物体との関わり方を変えるような効果はみられませんでした。**

これらの結果については、タブレット上に表示されたARキャラクターと、実際に手元にある使い捨て可能な紙コップ・紙皿とを子どもが別物として捉え、「仮想の要素」と「捨てても構わない物体」を切り離して認識していた可能性が考えられます。

●今後の展望

今後の研究では、子どもたちがARと長時間関わる状況や、より多様な環境設定及び文脈を用いることが求められます。これにより、ARが子どもたちの日常行動に及ぼす影響をより包括的に理解することが可能となるでしょう。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

皆さまにご協力いただきまして、子どもたちがARを通して物体と関わるころの一側面を調べることができました。ありがとうございました。

オンライン教育におけるずる行為を減らせるか

大西 実乃里（大阪大学大学院人間科学研究科 修士1年）

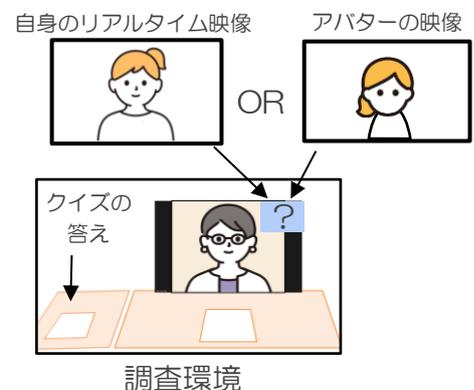
●背景・目的

近年、オンライン通信を使用して自宅でも受けられる教育が増えてきています。しかし、実際に対面して実施する学習と比較すると、子どもはオンライン環境でよりずる行為をしやすいたことが分かっています。では、オンラインのずる行為はどのように予防できるでしょうか？予防法の一つとして、鏡や自分のリアルタイム映像を見てもらい、自分を客観視してもらう方法があります。本研究では、この点に注目し、5歳のお子さまを対象に調査を行いました。

●方法

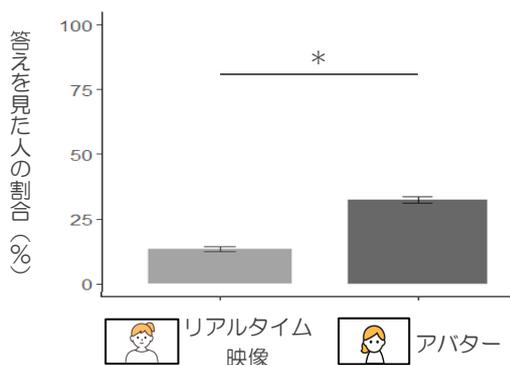
お子さまにはまずオンライン上の人と交流してもらい、その後相手が見ている中でクイズに取り組んでいただきました。クイズ中には少し離れたところに答えの紙を置き、お子さまがその答えを見るかどうかを観察しました。

クイズ中、画面の右上には自分のリアルタイム映像、または子どものアバターを映し出しました。クイズ中に目に入るのが「自分の映像」か「自分以外の映像」かによってずる行為のしやすさに違いがあるのかを調べました。



●結果

クイズ中に映し出されるものでふるまいが異なる？



オンライン通信をする画面に、自分のリアルタイム映像が映っていた人と、子どものアバターが映っていた人では、ふるまいが異なりました。

自分の映像を見たグループの方が、答えを見る（ずる行為）人が少なくなりました。

●考察・今後の展望

本研究から、オンライン学習における子どものずる行為の抑制に、子ども自身のリアルタイム映像を見せることが有効な方法であると分かりました。今後は、ずる行為以外の行動についても調査を進め、行動を変化させるような環境の調査を進めていきます。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

調査にご協力いただきありがとうございました！教育環境改善に役立つよう繋げていきます。

子どもと大人のおせっかいな人に対する評価

坂口 桃彩（大阪大学大学院人間科学研究科 修士1年）

●背景・目的

これまでの研究から、赤ちゃんの頃から子どもたちは、ほかの人の手伝いをする人を好意的に捉えることが知られています。一方で、日常場面では、お手伝いをする人が毎回良く思われるとは限りません。例えば、「おせっかい」と称される行き過ぎたお手伝いはネガティブな印象に繋がります。本研究では、5-6歳、8-9歳の子どもたちと大人が「おせっかい」な人に対してどのような印象を持つのかを調査しました。

●方法

お手伝いをしないAさん・適度なお手伝いをするBさん・おせっかいなCさんが登場するお話を見てもらい、3つの質問に答えてもらいました。

Aさん：お手伝いをしない



質問①A・B・Cさんのことをそれぞれどう思ったか
「とてもきらい～とても好き」で選択してもらいました



Bさん：必要な分だけ
お手伝いする



質問②A・B・Cさんのお手伝いを受けた子の気持ちを
「全く嬉しくなかった～とても嬉しかった」で選択してもらいました



Cさん：必要以上のお手伝い
（おせっかい）をする



質問③A・B・Cさんのお手伝いの量をどう思ったか
「少なすぎ・ちょうどよい・多すぎ」で選択してもらいました



●結果

5-6歳の子どもたちはおせっかいな人と適度なお手伝いをした人を同じように「好き」だと答え、おせっかいをされた子は適度なお手伝いをされた子と同じくらい「嬉しかった」と答えました。一方で、8-9歳の子どもたちと大人はおせっかいな人を適度なお手伝いをした人より「嫌い」だと答え、おせっかいをされた子は適度なお手伝いをされた子よりも「嬉しくなかった」と答えました。

ただし、5-6歳児も、8-9歳児も、大人もお手伝いをしないことは「少なすぎる」、適度なお手伝いは「ちょうどよい」、おせっかいは「多すぎる」ということを理解していました。

●考察・今後の展望

5-6歳の子どもたちは、おせっかいはお手伝いの量が多いということはわかっているにもかかわらず、おせっかいな人に良い印象を持っていました。これは、お手伝いをされると嬉しいものだとして捉えていたからだと考えられます。8歳以上になると子どもは、大人と同様に量が多すぎるとお手伝いでも嬉しくないものだとして捉え、おせっかいな人に悪い印象を持つようになると考えられます。

子どもたちがどのようなお手伝いをする人を良いと捉えているのか、今後も詳しく調べていきたいと考えています。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

調査にご協力いただき、ありがとうございました。

今後も子どもたちの社会性の発達について調査に取り組んでまいります。

赤ちゃんロボットの注意の向け方によって 養育者の教え方は変化するのか

伊藤 百加（大阪大学大学院人間科学研究科 学部4年）

●背景・目的

子どもが単語を学習するのに重要なものとして、特定のものや出来事に「子どもが注意を向け続ける力」や、子どもの注意を引き出す「お母さんの行動」があげられます。

本研究では、赤ちゃんロボットを用いて子どもの「注意を向け続ける力」の程度を変えることで、子どもの注意傾向の違いによってお母さんのかかわり方に違いがあるのかを調査しました。

●方法

生後18～23か月のお子さんがいるお母さんを対象に調査を実施しました。①提示されるおもちゃに長い間注意を向けるタイプと、②注意がすぐにそれるタイプのロボットのいずれかに、新しいおもちゃの名前を教える課題に取り組んでいただきました。そして、その時の発話や行動に違いがみられるのかを調査しました。



●結果

2種類のロボットに対して、(1)かかわり方（おもちゃの名前やロボットの名前を呼ぶ回数、おもちゃを振ったり近づけたりする回数）に違いがあるのか、(2)ロボットに抱く印象に違いがあるのかを調べました。その結果、(1)については、①のロボットとやりとりした参加者の方が、おもちゃを近づける動きを多くおこなっていました。そのほかの参加者の発話や行動にはあまり大きな違いは見られませんでした。(2)については、はっきりとした差はなかったものの、①のロボットとやりとりした参加者の方が、ロボットの学習力や思考力を高く評価する傾向にありました。

●考察・今後の展望

注意力の異なる2種類のロボットに対する参加者のかかわり方は、おもちゃをロボットに近づける動きのみに違いがみられました。従来、おもちゃを振る動きと近づける動きはどちらも子どもの注意をひきつけるものとされてきましたが、本研究の結果から、それぞれの動きには異なる目的がある可能性が考えられます。また、参加者がロボットに抱く印象においては、2種類のロボットの間にあまり違いはみられませんでした。これには、2種類のロボットの注意の特徴がわかりにくかった可能性や、ロボットに対する印象や行動の個人差が大きかった可能性も考えられます。

今後の研究では、これらの課題をさらに改善し、ロボットの注意の程度や反応性をより調整していく必要があります。また、ロボット視点や参加者視点でのカメラ映像も収集しているので、これらの映像の分析を行うことで、親子のやりとりについてさらに新しい発見があるかもしれません。今後も、養育者の行動に注目した研究を実施していくことが重要だと考えています。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

調査にご協力いただいたみなさま、誠にありがとうございました！

子どもは革新的な人物をどのように評価するか

永森 貴人（大阪大学人間科学部 学部4年）

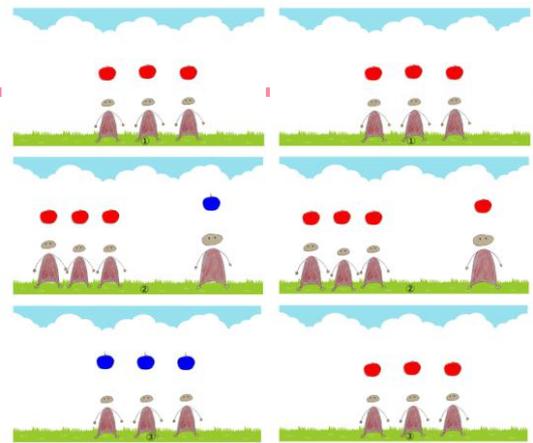
●背景・目的

革新とは、新たな価値を発見し社会に変化をもたらす行為です。革新をもたらす人は、人類の進歩と発展に欠かせません。しかし、革新的な人物を子どもがどのように評価し、学習の対象とするかは明らかになっていません。革新的な人物は既存の枠組みに非同調的な側面を持つため子どもに低く評価される可能性があります。一方で、革新的な人物は新しい知識を見つけ出す力があるので子どもに高く評価される可能性もあります。本調査では、子どもたちが革新者をどのように評価するのか2つの調査で検討しました。

●方法

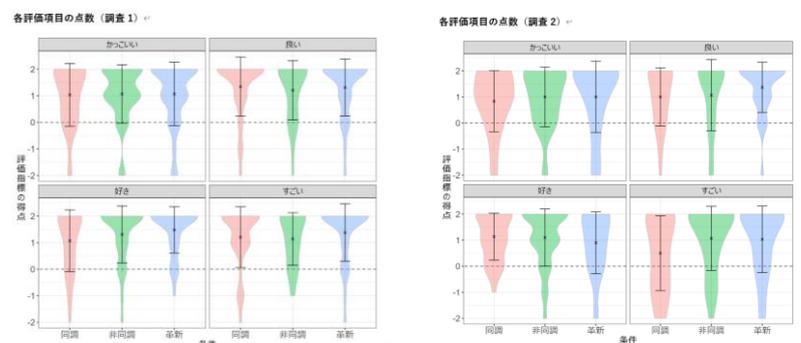
調査1では、子どもに架空の民族が登場する3つの話を読み聞かせました。3つの話ではそれぞれ「同調的な人物」「非同調的な人物」「革新的な人物」が登場しました。各ストーリーを読み聞かせた後に、登場人物の「好み」、「カッコよさ」、「すごさ」、「良し悪し」、の4項目を調査しました。

調査2では、子どもが登場人物を仲間だと思えるように登場人物の仲間の印を配って同様の話を読み聞かせました。



●結果

全回答を統計的に分析した結果、調査1でも2でもすべてのストーリーと項目で差は見られませんでした。



●考察・今後の展望

本調査の結果から、5～6歳時点では、同調的な人物、非同調的な人物や革新的な人物に対して異なる評価をおこなうということは見られませんでした。この結果について、先行研究では子どもたちが自ら革新的な方法を見出すようになるのは8歳以上であると示されていることから、もう少し上の年代になると子どもは革新者が集団にもたらす影響を理解できるのかもしれない。今後の調査では、対象年齢を広げて子どもたちがいつ革新について理解するのかを検討するとともに、同調、非同調、革新の3種類の登場人物を実際に子どもたちが模倣するかを検証することで、子どもたちがいつどのように革新的な人物からその技術や知識を学習するのかを明らかにしていきたいと考えております。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

調査に参加していただきありがとうございました。とても興味深いことが判明しました。

子ども型ロボットの注意特性によって 養育者は視線の向け方を変える？

森田 佳歩（大阪大学人間科学部4年）

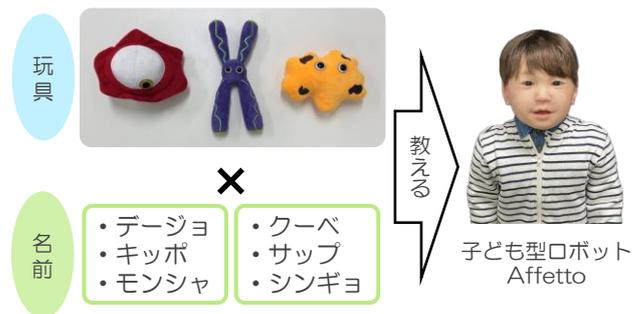
●背景・目的

子どもがモノの名前（単語）を学ぶためには、子どもがモノに対して注意を向けつづけることが重要です。これをサポートする際に、養育者が子どもの注意に応じて視線を動かし、子どもと同じモノを見るようにすることが有効である可能性があります。養育者の視線の動きが、間接的に子どもの語彙学習を助けているかもしれないのです。

では、子どもの注意の向け方に、じーっと見る、あるいはきょろきょろしがちといった特徴がある場合、養育者はその特徴に応じて、子どもとかかわる際の視線の向け方を調整しているのでしょうか。この問いを検討するため、1歳後半のお子さまを育てているお母さま52名に、子ども型ロボットAffettoに新しい単語を教えるという調査に参加していただきました。

●方法

参加者の方々には、①提示される玩具に長い間注意を向けるタイプ、または②きょろきょろするタイプのどちらかのロボットに対して玩具の名前を教えてもらい、その間の視線を計測しました。なるべく普段お子さまと遊ぶ際と同じようにコミュニケーションを取っていただくようお願いしました。



●結果

参加者がロボットの視線を追ってロボットと同じ玩具を見る割合と、ロボットの顔を見る頻度・時間について、①のロボットと関わった参加者と②のロボットと関わった参加者の間で差がみられるか調べました。結果として、ロボットの視線を追ってロボットと同じ玩具を見る割合は、①よりも②のロボットとやり取りした参加者のほうが高くなっていました。一方で、ロボットの顔を見る頻度・時間については、①と②の間で差がみられませんでした。

●考察・今後の展望

本研究の結果から、子どもの注意の散りやすさに応じて、養育者は「子どもが何を見ているのか」を捉える程度を調整している可能性が示唆されました。今後は、分析手法やロボットの設定を改良したり、養育者の視線だけでなく発話や動作にも注目したりすることで、ロボットの注意特性に応じた養育者の行動調整についてさらに検討していく予定です。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

調査にご協力くださった皆様、本当にありがとうございました！

1歳後半児はどのように音が似ている単語を学習するの？

LEE WEITUNG (大阪大学人間科学研究科 学部4年)

●背景・目的

数多くの単語の中で、「音韻隣接語」という単語があります。音韻隣接語とは、音が一つのみ異なる単語対であり、catとratのような単語の関係を指します。このような単語は音が近いため、乳幼児にとって学習が難しいと言われていました。そこで、本研究では18-20ヶ月児34名と20-23ヶ月児39名の2つの月齢グループを対象に、子どもは音韻隣接語をどういった条件下であれば学習できるのかを調べました。

●方法

まず、保護者の方に、お子さんが知っている単語を回答してもらい、その回答に基づいて「音が近い新しい単語」をお子さんに学習してもらいました。ここで、2種類の新しい単語を設けました。一つは知っている単語と**意味が近い**音韻隣接語（例：ネコと似ている「メコ」）、もう一つは知っている単語と**意味が遠い**音韻隣接語（例：クツと似ている「グツ」）です。これらの音韻隣接語を教えた後、2つの玩具を提示して「見て！メコはどっち？」などの質問をしました。このときのお子さんの視線を計測することで、それぞれの単語をおぼえたかどうかを調べました。



メコ

生物っぽい玩具

▶音：「ネコ」に近い

▶意味：「ネコ」に近い



グツ

生物っぽい玩具

▶音：「クツ」に近い

▶意味：「クツ」と遠い

見て！メコ。
メコはどっち？

●結果

音韻隣接語学習は、いずれの年齢層においても、意味が近いか遠いかにかかわらず、うまく学習できないという結果になりました。しかし、18-20ヶ月児では、もともとの単語（例：ネコやクツ）をお子さんがしっかり覚えていた場合、**意味が近い**音韻隣接語は学習できず、**意味が遠い**音韻隣接語は学習できることが示唆されました。

●考察・今後の展望

「ネコ」「クツ」などの単語をしっかりと覚えている場合、意味が近いか遠いかが、新しい音韻隣接語の学習のしやすさに影響する可能性が示唆されました。しかし、全体として、音韻隣接語は1歳後半のお子さんにとっては学習しにくいという結果になりました。今回の調査では、新しい音韻隣接語を教える前に、元々知っている単語を思い出してもらう場面があったので、この状況が学習を困難にした可能性があります。また、玩具の目立ちやすさなどの特徴も、学習のしやすさに影響したかもしれません。これらの状況を調整しながら、今後も調査を続けていきます。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

調査へのご協力、誠にありがとうございました！

子どもは自分で戦略を考えられたときに 粘り強さを発揮する

石川 萌子（大阪大学大学院人間科学研究科 博士後期課程2年）

●背景・目的

粘り強さは将来の学業成績など様々な成功を予測するため、いかにして粘り強さを高めるかが注目されています。これまでの調査から、①大人が難しい課題の戦略（箱の開け方）を教えても子どもの粘り強さは高まらないこと ②大人から教えられた戦略以外にたくさんの戦略を子どもが自分でみつけた場合、粘り強く取り組める可能性があること、がわかっていました。そこで、本研究は②の可能性について、確かな結果を得るために調査を行いました。

●方法

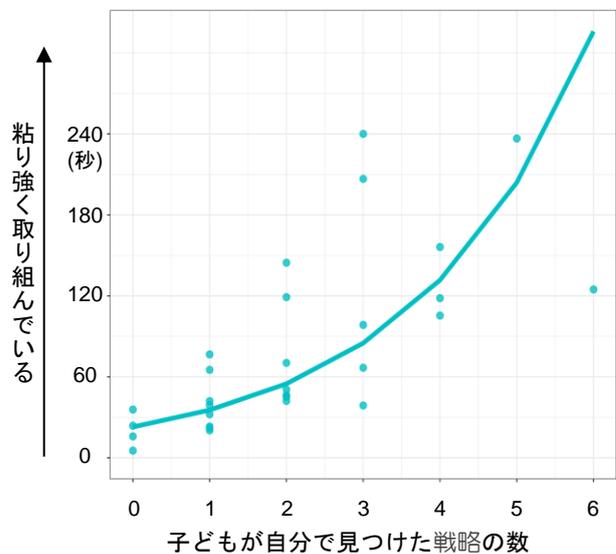
2024年度に年中・年長組に在籍していた4～6歳のお子様30名に参加していただきました。

粘り強さは木箱を開けるためにどのくらいの時間頑張るか（最大4分）で計測しました。調査者が木箱の戦略を1つ伝えた後に（例：箱を振ってみて）、お子さまに課題に取り組んでもらい、調査者が伝えた以外の戦略を何種類使用したか、どのくらいの時間課題に取り組んだかを調べました。



●結果

子どもが自分で思いついた戦略の数と、粘り強さとの関係について調べました。その結果、大人から言われた戦略（例：箱を振る）ではなく、自分で思いついた戦略（例：箱を引っ張る、箱を回す、箱をたたくなど）を使った数が多い子どもは、難しい課題により長い時間取り組んでいたことがわかりました。したがって、②の現象は頑健である、ということが明らかとなりました。



●考察・今後の展望

本調査から、大人から教えられた戦略以外に、子ども自身がたくさんの種類の戦略を見つけることができると、子どもは粘り強く課題に取り組めることがわかりました。自分でたくさんの種類の戦略を見つけているときは、子どもが主体的に困難に挑戦しているときだと考えられます。したがって、主体的に取り組むことが粘り強さには必要である可能性が高いです。今後は、どのようなアプローチが子どもの主体性を高め、粘り強さの向上に役立つのかについて調査を進めていく予定です。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

調査にご協力いただきありがとうございました。
教育や保育に貢献できるよう、研究を続けて参ります。

子どもと大人のおせっかいな人に対する評価

坂口 桃彩（大阪大学大学院人間科学研究科 修士1年）

●背景・目的

これまでの研究から、赤ちゃんの頃から子どもたちは、ほかの人の手伝いをする人を好意的に捉えることが知られています。一方で、日常場面では、お手伝いをする人が毎回良く思われるとは限りません。例えば、「おせっかい」と称される行き過ぎたお手伝いはネガティブな印象に繋がります。本研究では、5-6歳、8-9歳の子どもたちと大人が「おせっかい」な人に対してどのような印象を持つのかを調査しました。

●方法

お手伝いをしないAさん・適度なお手伝いをするBさん・おせっかいなCさんが登場するお話を見てもらい、3つの質問に答えてもらいました。

Aさん：お手伝いをしない



質問①A・B・Cさんのことをそれぞれどう思ったか
「とてもきらい～とても好き」で選択してもらいました



Bさん：必要な分だけ
お手伝いする



質問②A・B・Cさんのお手伝いを受けた子の気持ちを
「全く嬉しくなかった～とても嬉しかった」で選択してもらいました



Cさん：必要以上のお手伝い
（おせっかい）をする



質問③A・B・Cさんのお手伝いの量をどう思ったか
「少なすぎ・ちょうどよい・多すぎ」で選択してもらいました



●結果

5-6歳の子どもたちはおせっかいな人と適度なお手伝いをした人を同じように「好き」だと答え、おせっかいをされた子は適度なお手伝いをされた子と同じくらい「嬉しかった」と答えました。一方で、8-9歳の子どもたちと大人はおせっかいな人を適度なお手伝いをした人より「嫌い」だと答え、おせっかいをされた子は適度なお手伝いをされた子よりも「嬉しくなかった」と答えました。

ただし、5-6歳児も、8-9歳児も、大人もお手伝いをしないことは「少なすぎる」、適度なお手伝いは「ちょうどよい」、おせっかいは「多すぎる」ということを理解していました。

●考察・今後の展望

5-6歳の子どもたちは、おせっかいはお手伝いの量が多いということはわかっているにもかかわらず、おせっかいな人に良い印象を持っていました。これは、お手伝いをされると嬉しいものだと捉えていたからだと考えられます。8歳以上になると子どもは、大人と同様に量が多すぎるとお手伝いでも嬉しくないものだと捉え、おせっかいな人に悪い印象を持つようになると考えられます。

子どもたちがどのようなお手伝いをする人を良いと捉えているのか、今後も詳しく調べていきたいと考えています。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

調査にご協力いただき、ありがとうございました。

今後も子どもたちの社会性の発達について調査に取り組んでまいります。